

期待以上に面白い本だった。

自分はよく「書を捨てて谷に出よう」と言っていますが、それはスリバチの魅力が紙面で伝えることの難しさに悩んでいたからです。しかし土地の起伏を表現する描画ソフト「カシミール3D」が公開されたことで、スリバチ状の窪地の存在を紙面でも知ってもらえるようになりました。本書の立体地図や鳥瞰図は、国土地理院が公開している標高データを「カシミール3D」を用いて描画したものです。



東京湾の地形図。標高が高い場所は明るく、低い場所は暗く表示される(カシミール3Dにより作成)

谷頭（こくとう）にあたる三方向を丘に囲まれた窪地のことを我々は「スリバチ」と呼んでいる。

東京の谷間では、今でも湧水が見られる場所が多数存在している。「山の手（武蔵野台地）」には、表層土の下に関東ローム層と呼ばれる火山灰が降り積もってできた赤土の地層があり、降った雨を地下へ浸透させる性質をもっている。さらに、ローム層の下には不透水層が存在し、その上を雨水が流れてゆくことで、地表に露出した場所（崖）で湧水となる。この湧水を崖線(がいせん)タイプといい、立川市から大田区まで続く国分寺崖線と呼ばれる崖地では、この不透水層上部から流れ出る多くの清水を目にすることができる。

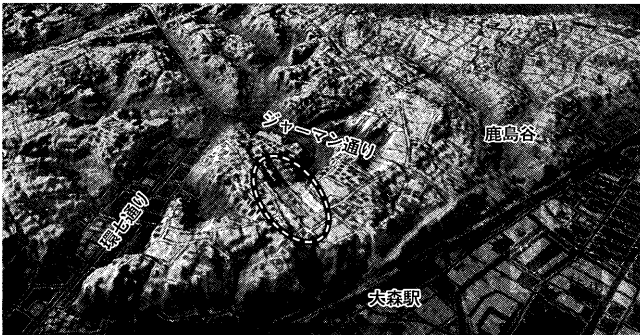
さらに谷頭タイプと呼ばれる湧水もあり、こちらは、三方を囲まれた二級スリバチ地形で観察できる。周囲の台地にゆっくりと浸透した地下水が、窪地の底で湧き出したものだ。井の頭池や善福寺池、三宝寺池などがこのタイプである。東京スリバチ学会が追い求めるのは、この谷頭タイプの湧水が生み出した地形である。

## 山王のスリバチ（大田区山王2丁目）

それでは次に、弥生の射的場の移転先となった山王の人工スリバチを眺めてみたい。

大森射的場は日本が西欧の列強国と肩を並べるべく、強力に軍国化を推し進めていた時期にあたる、1889年から1937年頃まで使用されていた。しかし、弥生のスリバチと同様に周辺の宅地開発に伴い射的場は廃止され、その後はテニスクラブの草分け的存在である大森テニスクラブに利用されることとなった。

流れ弾を防いでいた崖は、テニスコートの喧騒が周辺の閑静な住宅地に及ぶのを防ぐのに役立っている。この窪地は四方向を囲まれた貴重な一級スリバチ地形となっているが、もともとは、ジャーマン通りへと至る、天然の谷の先頭部分だったと思われる。実際に現地を歩いてみると、湾曲した細い路地が高級住宅地の中にひっそりと残されており、その暗渠路が大森テニスコートのスリバチに繋がっているからだ。



大森テニスクラブの窪地は一級スリバチでもある(大田区山王2丁目)

ここで注目してほしいのは、地形の高低差を強調するように建物が建ち並んでいる様子である。すなわち、谷底の平坦部では主に木造の低層建物が軒を並べ、斜面地には中層の建物が階段状に連なり、丘の上では高層の建築物が高さを競い合うという都市景観を呈していることだ。土地の起伏を強調するかのように建物が立ち上がり、都市のスカイラインが土地の起伏を増幅している。このような現象は港区や新宿区など、都心部の様々な場所で観察でき、東京スリバチ学会ではこれを「スリバチの第一法則」と呼んでいる。

この事例から分かることは、台地と低地は断崖で隔てられ、丘の上の町と谷の町は連続していないということだ。関東ローム層が作り出した断崖という地形的特色は、2つの世界が無関係に隣り合うような、独特な町の構成を生む要因になっているのだ。地形の断崖がそのまま町の境界となり、町が不連続となる様相を、我々は「スリバチの第二法則」と呼んでいる。谷から丘へ登る道はごく限られているので、スリバチ探索中に谷間の迷宮に放り込み、出られなくなることを「スリバチに嵌る」とも言う。

ここは覚えておきたい。

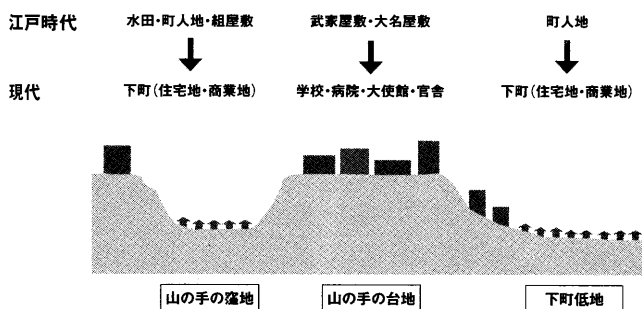
## 江戸の区画がそのまま現代に

それでは、地形の起伏に呼応する町の規則性とは、どのように生まれたのだろうか。

現在、我々が目にしている東京の町と地形の関係性や法則は、江戸の町を下敷きとし、ここからの変遷を経て紡ぎ出されたものである。だからまずは江戸の町づくりまで遡ってみたい。

身分・階級による棲み分けが行われていた封建制度の江戸時代、山の手台地（洪積台地）は武士の生活空間（武家地）で、下町低地（沖積平野）は商人や職人の住む生活空間（町人地）であった。

山の手台地に割り当てられたのは、主に大名屋敷や武家屋敷。大名屋敷の中には、谷地形を取り込んで庭園の一部に活用したものもあった。幕藩体制が崩壊し明治の世になると、その跡地は近代国家の首都・東京に必要な都市機能を盛り込むための、格好の器となった。政府関係の機関や各国の大使館、そして学校や病院など大規模な施設が、広大な敷地に、再開発ではなく「置換」という形で次々と建設され、新時代への対応が円滑に成し遂げられた。大名屋敷跡というゆとりある敷地が確保されていたため、19世紀のヨーロッパの各都市が経験したような都市の大改造をすることもなく、敷地割りや道筋もそのままに、江戸は明治へと継承されていったのだ。



一方、山の手台地に刻まれた谷地や窪地は、その多くが沼沢地あるいは湿地であったため、江戸初期では主に水田に利用されていた。その後、都市の発展、特に「明暦の大火（1657年）」以降の江戸の拡大に伴い、谷地や窪地は組屋敷（下級武士の屋敷）などに利用されていった。河川に沿った農耕地がスプロール化（無秩序な拡大）して町人地になった場所もあった。

ここで注目すべきは、江戸から東京へと続く町の開発の過程でも、土地の区画割はあまり変わらなかったという点だ。谷地や窪地も、山の手台地と同様、敷地の範囲内で建物が入れ替わっていったのである。つまり、多少の例外はあるにせよ、江戸時代から今日まで、東京の台地と谷地は、交互に混じり合うことなく、その土地なりの区割りのスケールに沿って、新陳代謝を繰り返してきたのだ。

台地上では大きな面積の区画割に応じて、時を経るにしたがい建物が高層化されていき、一方、谷地では、小区画のまま小規模建物が建て替えられていくという対照的な現象（ス

リバチの第一法則)は、都市の発展の「方向性」を示していると言える。

スリバチの第二法則とは、町の棲み分けがローム層台地の地形的特質と平行で、江戸・東京は崖によって分断された不連続な町が同居する都市構造を言い表したものにほかならない。あるいは二面性を持つ都市の「事情」を指す。

公開はされていないがスリバチ地形が庭園に活かされている例

・・・

・ 泉岳寺や東禅寺はじめ、谷頭に立地する寺の境内

東京スリバチ学会では、墓地で埋め尽く

された、吊いの谷戸を「クボチ」もしくは「スリボチ」と呼んでいる。墓場のある谷は古来「地獄谷」と呼ばれたが、その地獄谷も宅地開発の中で「樹木谷じゅもくだに」という呼び名に転化されている。都内には「樹木谷」と呼ばれる場所が三カ所存在しているので紹介しておきたい。

ひとつ目は麴町の善国寺坂がある谷戸で、千鳥ヶ淵川の谷頭にあたる。

・・・

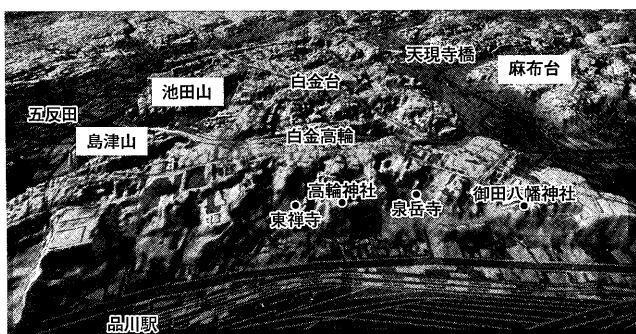
ふたつ目は神田明神の北側、蔵前橋通りの清水坂がある谷地のことだ。

・・・

3つ目は高輪にある谷で、玉名川たまながわ支流の谷頭にあたる場所だ。元来は刑場があった谷戸とされ、現在は緑の生い茂る共同墓地に利用されている。

さて、東京スリバチ学会が「スリバチギンザ」と呼んでいる高輪の台地は、低地に向かっていくつものスリバチ状の窪地が刻まれ、岬状の台地と窪地を交互に楽しめるスリバチ散策の適地であるが、ここでは神社と寺院の立地に注目したい。

まず窪地に立地するのは、東禅寺・泉岳寺。いずれも崖下から湧き出る清水を活かして池を造り、境内の庭園に取り込んでいる。一方、岬状の台地突端には御田八幡(みたはちまん)神社や高輪神社、品川神社などがある。極めて

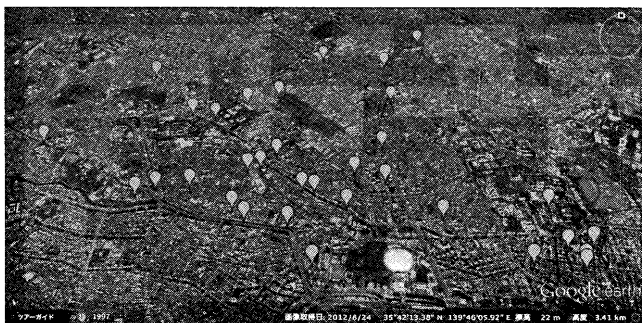


スリバチギンザと呼んでいる高輪の凹凸地形を海側から眺める

相反的な立地特性とも言えるが、どちらも地形的には丘と谷の最深部、行き止まりの「奥」という点で、ネガポジの関係になっているところが興味深い。

東禅寺と泉岳寺境内には湧水池(ゆうすいち)があると紹介したが、谷頭=水源という場所に寺院が建立された理由として、水源を守る、あるいは水利権を押さえるという解釈も可能だろう。水源に立地する寺院としては調布の深大寺を代表例として、渋谷川水源の天龍寺や蟹川支流水源の太宗寺など、都内には多くの事例が存在する。

地域の人だけが知るような階段のある道に入り込むと、自分も秘密を共有しているような感覚になる。車で通れる大通りではなく、**歩かねば知ることがない町の裏手の道筋まで知っていることが妙な満足感につながる**のも、階段探索のひとつの楽しみかもしれない。それは土地勘を持つということでもあり、町への愛着を深めることにもつながる。



マンションの分布(Google earthのキャプチャー)



地形図に重ね合わせた(東京地形地図によるKMLデータをGoogle Earth上に表示したものをキャプチャー)

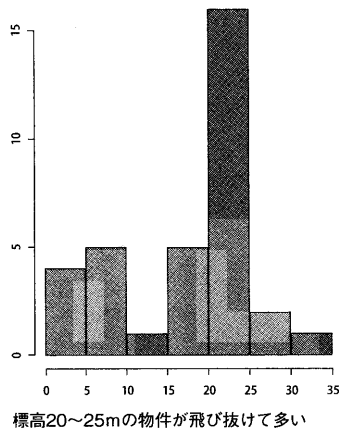
右ページの上の図は、東京都文京区でここ5年以内(2013年時点)に建てられた分譲マンションのうち、ネットで検索できた35件の分布である。

一見なにげなくらばっているようだが、これを地形図に重ねてみるとこうなる(右ページの下の図)。

文京区は高台と低地がまんべんなく広がる、坂の多い街だ。しかし、これらの不動産物件は高台に集中しているように見える。

確認のために、物件の標高の分布をヒストグラムで表してみた(上図)。

縦軸は物件数、横軸は標高を示している。明らかに高い場所に集中していて、つまりマンションは高台に建っていることが分かる。



つまり

高台の魅力のひとつは地盤だ。低地の軟らかい沖積層の上ではなく、高台の固い洪積層の上に建っているということがアピールになるのである。

単なるまち歩きではなく、都市と地形の有り様を味わうスリバチ散歩に必要な地図の使い方は、どちらかというと後者の「読解」だ。もちろん、スリバチ地形散歩はあくまでも実際に歩いて都市の地形を体験するものであって、地形図の上にスリバチの形を発見したり、それを図上で研究したりすることが主な目的ではない。町に出て、坂道や階段を上り下りし、あるいはわずかな道路の勾配を感じ取り、地形と建物の関係を眺めたりする、そういう実空間の移動と観察の経験がスリバチ地形散歩の目的であり醍醐味である。

地図や地形図にはさまざまなものがあるが、スリバチ散歩のスケールに適しているのは、国土地理院が発行する**1万分の1地形図**である。全国の主要都市がカバーされていて、細かい街路や建物の形がとても詳しく描かれている。

建物は、商店とそれ以外に色分けされているので、商店街のありかがわかる。また、2m間隔の等高線が描かれているため、地形を詳細に読み取ることができる。これを眺めながらスリバチを歩くと、月の前の坂道や向こうに見える擁壁などが、より大きな地形の一部として見えているということが把握できる。まさにスリバチ散歩向きな地図なのだ。

東京時層地図

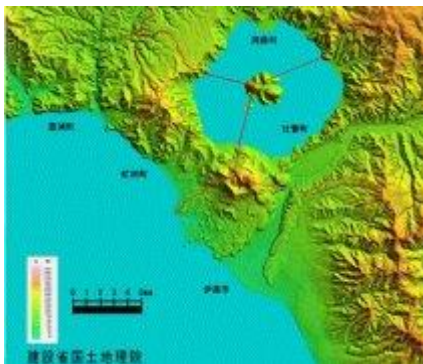
<http://www.jmc.or.jp/app/iphone/tokyo/>

国土地理院が製作し、公開している地図データのひとつに、デジタル標高モデル（DEM）というものがある。これは、航空機から地上をレーザー光でスキャンして得られた立体情報を整理、編集して作られたもので、地上を5m四方のグリッドに分割して、それぞれのグリッドごとに最小で10cm単位の標高が記載されている。10cmというと、例えば市街地の道路で車道と歩道を分けている縁石の段差よりも細かい値である。国土地理院によれば、測量誤差を考慮して50cm程度の正確さが妥当であるとのことだが、それにしてもかなり微細な、従来の地形図とは桁の異なる地形情報である。

国土地理院のウェブサイトでは、都市部や河川沿い、海岸部などを中心に、日本の国土のかなりの範囲をカバーするDEMデータが公開されていて、誰でも無料でダウンロードすることができる。これを、カシミール3Dなどの地形表示ソフトに読み込んで描画することで、地形図を作成できる。

地形図における地形表現にはさまざまなやりかたがあるが、「陰影段彩図」と呼ばれる、標高の違いを色の変化で表し、陰影を施して地形をレリーフのように立体的に描いたものが、直感的で分かりやすい。

~~~~~



<http://www.gsi.go.jp/WNEW/LATEST/USU-map-tikei.htm>

~~~~~